〈新刊紹介〉

波多野完治著

「第二信号系理論と国語教育」

指導要領の改訂は、国語教育の根本的な問題について再検討を促す一つの契機となったが、とくにこの二・三年、本書の著者の波多野完治氏や大久保忠利氏・国分一太郎氏などによって、第二信号系理論に基礎をおく立場から、国語教育の目的・目標・課題・性格などの根本問題について、独自の見解が提示されてきている。本書もその一つで、波多野完治氏がこれまでにあちこちで発表されてきた論稿を整理して、組織されたものである。

ところで、「第二信号系理論」とは、わかりやすく言えばどういうものであろうか。著者はこう説明している。

「……人間は条件反射によって、行為の体系をつくり出すが、その条件反射には二つの種類がある。一つは第一信号系と称せられるもので、犬に鈴の音をきかせると、ヨダレをだすという、例のよくしられた習慣の体系である。

もう一つが第二信号系と称せられるもので、話す、聞く、読む、書く、などの記号からなる条件反射である。パヴロフはこれを信号の信号といっている。

信号の信号は、ある面では第一信号と同じにはたらく。

『アブナイ』

という声がかけられると、人びとは、イナビカリがしたときと同じように危険にそなえる身がまえをする。

しかし、第二信号たるコトバはこのほかに二つの行動を人間にゆるすことになる。

一つは一般化を可能にすることである。

もう一つは、物と物との関係をはっきりさせることである。

前者によって、概念や法則が人間にできてくる。

後者によって、物と本質が、物のかたちとちがう場合のあることを知るようになる。

どうして、こういうことができるようになるか。

それは、コトバは一方においては、第一信号と同じ性質やはたらきをもつが、他方において、それは、信号の信号なので、物から少しはなれる。つまり物から一定の距離をおいて、物をみたり考えたりすることをゆるす。

人間にしても、動物にしても、あんまり物にくっつき、場面に制約されていると、感覚や感情がはたらきすぎて、物を冷静に客観的にながめることができない。

信号の信号というはたらきのおかげで、このことができるのだ。」（72～73ページ）

少し引用が長くなったが、波多野完治氏の国語教育論をとらえるためには、ここのところをしっかりおさえておかなければならないように思う。氏の国語教育論の発想基盤は、おそらくここにあると考えるからである。

波多野完治氏によれば、国語教育には、第一信号的な面と第二信号的な面とがある。第一信号的な面というのは、国語そのものに対する知識・技能・態度などを養う面であり、第二信号的な面というのは、「事物とむすびついた」性質の面、換言すれば、「感性的認識から理性的認識への上昇」という、社会科や理科でおこなわれるものの基礎作業としての面である。この二面を、うまく調和させながら学習させていくのが望ましい国語教育のあり方だと、著者は考えておられる。

また、文学教育の課題については、語感を養うという第一信号的な面とともに、感性的なものの理性化、感性的認識から理性的認識へという面を主要課題としていると述べておられる。

以上のように、本書の特色は、パヴロフによって発意された第二信号系理論がわかりやす

く述べられていること、およびそれに基礎をおく国語教育論が展開されていることなどにあると思われる。しかし、その他の論稿、たとえば作文教育論・作文教育史論・児童文学論などにも、ユニークな見解がみられ、それぞれに特色をもっている。「芦田・友納論争」もその一つであるが、この論文は、二十五年前に書かれたものである。芦田・友納論争は、さらにそれより二十余年以前におこなわれた。こういう「古い」ことを、しかも二十五年前のままで再録した理由について、著者は、「そこ（芦田・友納論争）に、生活学習、系統学習の対立や、それについての解決策がいろいろでてきていることは興味ふかい」（213ページ）からであると述べておられる。しかし、わたくしどもは、芦田・友納論争をそのようなものとして把握し得た著者の「眼」に、むしろおどろきを感じる。著者は、この論文によって、国語教育史の一つの把握のしかた、深く、あざやかな把握のしかたを示されたとも受けとれる。少なくとも、わたくしどもは、そのような面からも学ぶようにしたいものである。このことは、「芦田恵之助について」においてもあてはまる。著者も言われるように、「芦田さんのような人の『遺産』をとり出すことは、実に微妙な、細心の注意のいる仕事」である。著者は、そういうむずかしいケースの一つとして、芦田恵之助氏の遺産の評価をこころみておられる。わたくしどもは、国語教育研究の具体的方法論という角度からも、この論稿に学びたいと思うのである。

本書は、右のように、かなり多方面な論稿がおさめられているわけであるが、大きくは五部に分けられている。もっとも、この構成は、「まえがき」によると、明治図書編集部江部満氏の手になるもののようであるが。以下、本書の内容を知っていただくうえでつごうがよいと思うので、「もくじ」を示しておきたい。

Ⅰ
一　国語教育の目標
二　国語教育の二つの立場
三　国語教育の課題
Ⅱ
四　言語教育と心理学
五　言語と思考の問題
Ⅲ
六　文学教育はなぜ必要か
七　文学における児童観
Ⅳ
八　現代の作文教育
九　作文の学習心理
十　視聴覚教育と作文
Ⅴ
十一　つづり方教育の問題史的展開
十二　芦田・友納論争
十三　芦田恵之助について

Ⅰは、第二信号系理論の立場からの国語教育本質論、Ⅱは、第二信号系理論、Ⅲは、文学教育論、Ⅳは、作文教育論、Ⅴは、作文教育史論と考えることもできよう。本書の書名にふさわしいのは、ⅠⅡⅢ、とくにⅠⅡのようである。その他は、とくに第二信号系理論との関係で述べられているとは受けとれないが、戦前から国語教育に深い関心を寄せてこられた著者の、心理学の立場からの立論として、学ぶべき点の多いことは、すでに述べたとおりである。読者は、自分の関心領域にしたがって、それぞれの個所を、独立論文として読んでもさしつかえなかろうと思う。

第二信号系理論の要点を知ろうとする人、またその立場から国語教育を考えなおしてみようとする人、国語教育の根本的なありかたを考えようとする人はもとより、文学教育・作文教育に関心をもつ人にも、一読をおすすめしたい。（昭和36・10、明治図書出版K・K刊、A5判二三三ページ、五三〇円）

（大槻和夫）